

2015年3月1日 主日礼拝
説教「いちばん大切なこと」
マタイの福音書 22章 34-40節

【神さまの宝物】

私たちは、神さまの宝物です。神さまはすべての人のために、主イエスを十字架につけてくださいました。だから、すべての人は神さまの宝物なのです。そんな神さまの宝物である私たちは、どのように生きるのでしょうか。

主イエスの答は、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」(37) でした。自分の全存在で神さまを愛するように、とおっしゃったのでした。

【愛するとは何か】

「愛する」ことは、単に「好き」ということとはちがいます。「愛する」とは、「たいせつにする」こと。私たちが宝物のようにたいせつにされる神さまをたいせつにすることです。

それが、どういうことかは、母親と子どもを見ればわかります。母親は、子どもに自分を与えます。母乳を与え、時間を与えます。子どもが病気になったら夜も寝ません。自分の健康も犠牲にするのです。神さまは、そのように私たちが愛してくださっています。私たちが創り、育て、そして御子イエスを十字架につけてくださったのです。

一方、私たちが神さまを愛するのは、子どもが母親を愛するようです。子どもはお母さんを

信頼します。「お母さん」と呼びながら、しがみつきます。それが、子どもの愛です。私たちも神さまを信頼し、神さまの中にやすらぎます。それが、神さまを愛することなのです。

【愛の世界】

ところが、主イエスは続けて、もうひとつの答をおっしゃいました。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(39) です。ひとつの質問に二つの答をなさったのは、この答が二つでひとつだからでした。神を愛すること、と人を愛すること。二つの答が指し示すのは、愛の世界です。主イエスは、あなたがたは愛の世界に生きなさい、そうおっしゃったのでした。

愛の世界、そんな世界があるなら、だれでも、そのように生きてみたい、と思います。けれどもみな、そんな世界がほんとうにあるのか、と思ってしまうのです。仮に自分が他の人を愛しても、その人は自分を拒むのではないか。しょせん愛し合うとか、赦し合うとか、覆い合うなどは、きれいごと。私たちの人生には、ほんとうには起こらないのだと思ってしまうのです。

私たちが、愛の世界を信じられない理由、私たちがおじけづく理由は、愛を受け入れてもらえなかった経験にあります。だれにも相手をたいせつにしようとして、うまくいかなかった歴史があります。その歴史が私たちの常識を作っています。「自分が愛の世界などと言っても、どうせだれもついて来ない」「あの人を愛そう

としたって、どうせ、鼻で笑われるのにちがいない」そんな思いが湧いてきます。みんなが愛の世界を望んでいるのに、たがいに牽制し合って、その中に入ることができないでいるのです。傷つくことを恐れて、愛し合えないでいるのです。「さあ、愛し合いましょう」などということばも、気恥ずかしくなってしまうでいて、クリスチャンどうしであっても、めったに口にしなくなっていたりするのです。

けれども、主イエスは私たちが愛してくださいました。ご自分が傷つくことを承知で愛してくださったのです。主イエスは傷つくために、この世界に来てくださいました。そして、さあ、恐れずに思いっきり愛し合おうとおっしゃるのです。主イエスに触れていただいた人は、愛の世界を信じることができます。十字架の愛に触れていただいた者は、もとのままではいられないで、主イエスの中にある愛の世界に入っていくのです。

【主イエスの招き】

質問した律法の専門家は、主イエスをおとしいれようとしてしました。けれども主イエスは、「あなたもワナをかけることをやめて、愛の世界に生きてらよい。さあ、おいで」と招いてくださいました。「さあ、私といっしょに愛の世界に生きよう」と招いてくださったのです。主イエスは、今も、私たちが招いてくださっているのです。